

『源氏物語』における結婚相手選びについて

金賢貞*

目 次

1. 序
 2. 男側からの結婚相手選び
 3. 女側からの結婚相手選び
 4. 結
-

1. 序

『源氏物語』は男女の恋が中心となる物語であるため、様々な男女の結婚や恋について語られている。現代と昔は大変長い歳月で隔てられているため、人々の考え方も違うし、その文化も多くの違いを見せている。『源氏物語』の中には正式な結婚相手としてではなく、遊び相手や一時的な恋人として扱われている登場人物も多く見られる。本稿では、そのような遊び相手や一時的な恋人としての場合は除き、れっきとした妻や夫として扱われている登場人物を対象にし、その場合の結婚相手選びの様々な様相について考察をするつもりである。

結婚が人生の一大事であるため、今まで平安時代における結婚については様々な方面から研究されてきた。特に平安時代における文学作品を中心にした研究が多く、中でも『源氏物語』における結婚については登場人物研究の時、重要なテーマとして扱われてきた。登場人物研究の場合が代表的であるが、『源氏物語』における結婚についての研究も民俗学的な方面、また物語の流れの中で結婚の持つ意義など様々な方面からされ

* 韓国伝統文化学校 副教授, 日本古典文学及び古代民俗学

ているが、本稿では特に登場人物を取り上げて結婚相手を選ぶ時の特徴について総合的に考察してみたい。

当時は一夫多妻制と政略結婚が一般的であったため、結婚が成立するため相手を選ぶ基準とか経緯などが現代と大きく違う。もちろん、男の場合と女の場合、結婚相手選びの様子に大きい違いを見せている。このような特徴を中心に考察し、さらに『源氏物語』における結婚相手選びの様子には、平安時代に書かれた他の作品には見られない特徴があるので、それをもあわせて考察するつもりである。

考察の前に一つ前提にしなければならないのは、先述したように『源氏物語』における数多くの結婚形態の中で正式な結婚だけを対象にするつもりであるが、特に今回の考察では正妻または正式な夫、またはそれに準ずる結婚相手として迎えられる場合で、特に物語の中で妻を選ぶことと婿を選ぶことが長々と重要なテーマとして語られている主な結婚相手選びの例を取り上げて考察をしたい。

結婚相手選びの様子についても様々な方面からの考察が可能であろうが、本稿では男側から妻を選ぶ時と女側から配偶者を選ぶ場合の二つにわけて考察するつもりである。男側と女側の二つに分けてそれぞれの結婚相手選びの様子を考察する理由は、男性と女性の場合その相手選びの基準や様相、後の物語展開に少々違いが見られるからである。政略結婚と一夫多妻制の中で、結婚相手を選ぶことにも男女は大変違う立場と経緯で結婚が決められており、考察に値する。

ただし、結婚というのは両方の意思で決められるものであり、一方的なものではない。女側からの結婚相手選びといって旦那をむかえる女の立場から物語が述べられている場合も、男側からの同意があってこそ結婚が決まるのであるそのため、結婚が両方の意思によって決まることであるということは前提におき、物語の中でより主に述べられている側を対象とする。そして、本稿ではできるだけ『源氏物語』の本文を中心に考察をすすめていきたいと思う。

2. 男側からの結婚相手選び

当時においても結婚は一生の重大事で、自分の結婚の相手を決めるのはなかなか難しいことであった。一夫多妻制で複数の妻を持つことができる男の立場から、やはり妻になる人を選ぶことには大変慎重にならざるを得なかったのである。『源氏物語』本文の左馬頭の話を用いてみよう。

おほかたの世につけてみるには咎なきも、わがものとうち頼むべきを選らん、多かる中にもえ

なん思ひ定むまじかりける。男の朝廷に仕うまつり、はかばかしき世のかためとなるべきも、まことの器ものとなるべきを取り出ださむにはかたかるべしかし。・ ・ ・ (中略) ・ ・ ・ 狭き家の内のあるじとすべき人ひとりと思ひめぐらすに、足らはであしかるべき大事どもなむかたがた多かる。とあればかかり、あふさきさにて、なのめにさてもありぬべき人の少なさを、すきずきしき心のすさびにて、人のありさまをあまた見合はせむの好みならねど、ひとへに思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくはわが力いりをし、直しきつくろふべきところなく、心になふやうにもやと選りそめつる人の定まりがたきなるべし。(「帚木」137頁)²⁾

有名な雨夜の品定めの際の左馬頭の話であるが、女でも男でも完全な人はいない。そのため、女は多いが、実際一生の伴侶となる人を決めようとしたら、それが大変難しいという。結婚したら女は主婦として家の中でしなければならないことが数多いが、それが完璧にできる人は少なく、理想の主婦になれる女はなかなかいない。だとしたら、多少の弱点は気にせず、いっしょに過ごすしかないのである。このように妻を何人も選べる男の場合も、遊びではない結婚相手を選ぶには大変様々なことを悩みながら決めなければならなかったことがわかる。

では、まず光源氏の結婚相手について考察してみる。主人公であるだけ『源氏物語』の中でもっとも主に語られているのは源氏の結婚相手なのである。葵の上が彼の最初の正妻であるが、この場合は葵の上の父の強い要望により決められた結婚なので、次の章で考察することにして、ここでは源氏にもっとも愛された妻紫の上が選ばれた経緯について考えてみたい。

紫の上は当時の一般的な結婚相手選びの観点からすると、かなり特殊な場合である。彼女は藤壺の姪にあたり、病気の加持に北山を訪れた源氏が10歳ぐらいの幼い彼女から藤壺の面影を見て、結婚を前提に後見を積極的に希望する。しかし、まだ幼いという理由で世話をしていた祖母の尼に断られる。正妻葵の上と仲がよくないこともあり、紫の上に未練をずっと持っていた源氏は、尼がなくなり、紫の上の実父が彼女を自邸に引き取ろうとしているのを知って急いで自分が先に引き取る。

君、いかにせまし、聞こえありて、すぎがましきやうなるべきこと、人のほどだにものを思ひ知り、女の心かはしける事と、推しはかられぬべくは、世の常なり、父宮の尋ね出でたまへらむも、はしたなうずろなるべきを、と思し乱るれど、さてはづしてむはいと口惜しかべければ、(「若紫」326頁)

本文からわかるように、実父がいるのにこっそり他人の娘を何の関係もないものが引き取るのはいけないことで、源氏もそれがよくわかっている。しかし、なんとしても紫の上を自分のもとに引き取り、妻にしたいあまりそのような危険もおかして、二度とないチャンスであるとかかなり強

2) 以下『源氏物語』のテキストは小学館の日本古典文学全集本を用いた。

引に行動しているのである。

このようにして源氏のもとで理想の妻として養育された紫の上は、結局源氏の正妻格にまでのぼり、源氏の生涯を通じての最愛の妻となる。実母は早くからなくなり、実際彼女はこれといって権力のある親の後見もないし、身分が高いわけでもない。かえって、よりどころのない心細い立場である。また、自分やまわりの人から源氏に積極的に求婚をして妻になったわけでもない。

彼女が源氏に出会ったのはあまりにも偶然のことで、偶然北山を訪れた源氏が、彼の恋慕する藤壺に紫の上が似ているのを見て、また、実際紫の上が藤壺の姪にあたるということを知って、彼女を妻にしようと思ったのである。彼女が源氏にもっとも愛された重要な原因の一つは、幼いころから源氏が自分のもとで、自分好みの妻に育て上げたことにある。本来の性格も素直でかわいかったはずであるが、それを自分の理想の女性につくりあげたため、葵の上などのようにプライドが高く冷たい女性よりは全然源氏の好みにあったはずである。また、彼女が変にプライドが高く素直じゃない妻にはならなかったのは、自分の境遇にも原因があろう。身分が特に高いわけでもなく、権力のある後見がなかったため源氏をもっぱら頼りにするしかなかったのである。

このように紫の上の場合は、いかにも物語の劇的な場面設定に似合う、ドラマチックな経緯で源氏の妻になるが、もう一人おもしろい経緯で源氏の妻になった幸運の女性がいる。それは明石の君である。彼女は前播磨守であった明石の入道の一人娘で、明石の入道は彼女に自家繁栄の夢を託して大事に養育したのである。源氏が須磨に退去し心細くて寂しい日々を送っていた折、明石の入道は霊夢に導かれて、暴風雨をおかしながら源氏を明石の自宅に迎える。実際明石の入道は桐壺更衣の父が叔父なので、源氏とは遠縁である。

ここでは、夢というものが二人を結婚させるのに重要な役割を果たしている。当時の人たちにとって夢は非常に重要な意味や不思議な力を持つものであり、身分も違うし、まったく関わりのない源氏が明石の君を結婚相手と決めるのに大きな影響をおよぼしている。

「去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らずすることはべりしかば、信じがたきことと思うたまへしかど、『十三日にあらたなるし見せむ。舟よそひ設けて、必ず、雨風止まばこの浦にを寄せよ』と、かねて示すことのはべりしかば、こころみに舟のよそひを設けて待ちはべりしに、いかめしき雨風、雷のおどろかしはべりつれば、他の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、用ゐさせたまはぬまでも、このいましめの日を過ぐさず、このよしを告げ申しはべらんとて、舟出だしはべりつるに、あやしき風細う吹きて、この浦に着きはべること、まことに神のしるべ違はずなん。（「明石」221頁）

このように入道が見た不思議な夢の告げに加わり、その前に源氏も夢の中で父の桐壺院を見たのである。ここで明石の入道が見た夢は明石の入道が暴風雨をおかしながら源氏を明石に迎える役割をし、源氏の夢は異国ではじめて会う明石の入道を源氏が何の疑いもなく喜んでその邸に行くようにさせている。つまり、ここで夢は源氏と明石の入道を非常に無理

なく引き合わせる役割をしている。

さらに、明石の君と源氏の結婚の場合夢はもう一つ重要な役割をしている。明石の入道は明石の君の懐妊の時の夢を信じて、彼女を高貴な人と結婚させるつもりで、幼い時から姫として誰にも劣らぬりっぱな教育をさせていたのである。そのため、明石の君は教養と気品を持ち、京で身分の高い姫君に見慣れた源氏が、格段の身分差にもかかわらず彼女を結婚相手と選択するのに不足のない女性として認めている。もし、夢のおかげで源氏を自宅に迎えたとしても、明石の入道が源氏と自分の娘を結婚させることに強い願望を持っていなかったら、また明石の入道が希望したとしても、明石の君がまわりの田舎の女性たちのように、りっぱな教育をうけず教養も足りなかったとしたら、源氏の妻になって後々まで栄華を見るのは不可能であったはずである。

このように、源氏が明石の君を結婚相手として選択することには、非常に様々な背景設定―源氏の須磨退去、霊夢の告げで明石の入道との出会い、明石で明石の君との出会い―が緊密に関わって相互作用しているのである。さほど身分が高いわけでもない、地方に住んでいた姫君が不思議な縁で源氏に出会って結婚をし、後は自分の産んだ娘が中宮にまでなる栄華を見るのである。

紫の上も明石の君も言わば玉の輿で、彼女たちが源氏の妻になる経緯は大変劇的で、小説をよりおもしろく興味津々なものにするのに大きな役割をしている。

次は夕霧の妻を選ぶ経緯について考察してみたいと思う。よく知られていることであるが、当時の貴族の結婚相手選びには身分が第一の条件であった。

いとこ同士、叔父と姪、叔母と甥などの近親結婚は、狭い貴族社会で、結婚の条件として、何よりも相互の身分のつりあいを重視するところから、必然的に生じてきたものである。結婚の条件として第一に、誠意、志の厚さを求めるのは、上流貴族よりもむしろ身分の低い階層のことであった。上流貴族は結婚の条件として何より身分を考えた。³⁾

そのため、ここでも指摘されているように近親結婚も普通に行われていた。また、

配偶者の選択の範囲という点からみると、日本民族の婚姻には、未開民族の間に多い氏族外婚や、朝鮮・中国などの同姓不婚という拘束はみられない。これは日本の婚姻の一つの大きな特徴である。皇室その他の古い系譜にも二親等や三親等の近親者愛だの近親婚姻の例が多く、庶民の間でも親戚間の婚姻は現在でも行なわれ、近親婚を忌む観念はあまり強くなかった。⁴⁾

のように近親結婚が日本の特徴の一つでもあったことがわかる。『源氏物語』の中で近親

3) 清水好子外(1996)『源氏物語手鏡』新調選書, p.110

4) 『日本風俗史事典』(2000) 弘文堂, p.201

婚の代表的な例が夕霧の正妻雲居雁の場合で、彼らはいとこ同士の結婚をしている。しかし、次の本文に注目したい。

親しきほどにかかるは、人の聞き思ふところもあはつけきやうになむ、何ばかりのほどにもあらぬ仲らひにだにしはべるを、かの人の御ためにも、いとかたはなることなり。さし離れ、きらきらしうめづらしげあるあたりに、いまめかしうもてなさるこそをかしけれ。（「少女」36頁）

これは頭中将の言葉であるが、これによると近親結婚についてまったく問題のない時代であった、と言い切るのは難しいだろう。頭中将はいとこ同士で結婚するのは一般的に軽々しく思われ、特に身分の高い場合は大変見苦しいことである、そのためまったく他人のすばらしい相手と結婚した方が全然いいと話している。結婚に反対の立場から出た言葉ではあるが、当時近親結婚がまったく問題のない、いいことでもなかったことがわかる。

しかし、だからといっても親戚同士の結婚が普通に行なわれた当時の風習から見て、いとこ同士だという点だけでは結婚の妨げになりにくかったが、夕霧の場合他の理由で結婚するまで7年間も苦勞させられる。では、夕霧の結婚について考察してみたいと思う。

夕霧は大宮のもとで子供の頃から一緒に育てられた雲居雁に恋をしていた。それは雲居雁も同じことであり、10歳になって別々のところで暮すようになってからもお互い恋情を抱き続けていた。雲居雁は頭中将の娘で、源氏の正妻の息子である夕霧は全く問題のないすばらしい結婚相手であったはずであるが、頭中将は大反対する。それは藤壺女御が他の後宮を超えて中宮となった時期で、弘徽殿女御が彼女に負けたということを頭中将は大変悔しく思っていた。そのため、雲居雁は東宮の后に入内させてなんとか逆転のチャンスにと思っていたので、敵関係にある源氏の息子に、しかも東宮よりもずっと劣る男に大事な娘をやりたくなかったのである。

さらに、雲居雁の乳母は「めでたくとも、もののはじめの六位宿世よ（「少女」51頁）」と夕霧が六位でしかないのを残念に思い、雲居雁の最初の結婚相手が六位にすぎない運命について大変嘆く。いくら容貌がすぐれていて、家柄もよく将来性があっても、現在の官位も重要である。その点夕霧は、雲居雁の立場で彼女を大事に思っている人々の目には結婚相手としてふさわしくないとばかりうつったのである。

このように結婚を反対された主な理由は親同士が政治がらみの敵関係にあったためであるが、ついに頭中将が和解を求めてきて、結婚が許される。長い間夕霧が彼女を諦めずまじめに結婚を念頭において文通をした甲斐があり、内大臣が夕霧を結婚相手として許し、二人はついに仲のいい夫婦として結ばれることができる。

しかし、この際にも惟光の娘である藤典侍とは人目を忍ぶ恋仲を続けていた。正式な結婚をする場合でも、それとは関係なく忍び恋の相手は存在したのである。夕霧は12人の子供がいたが、その中には藤典侍の子供も5人いる。

しかし、長年の恋も成就し、子たぐさんにめぐまれた夕霧であったが、年月が流れるにつ

れて日常生活に安住しきっている雲居雁に恋も薄れ、親友柏木の未亡人落葉の宮に心が傾く。夕霧の2番目の妻である。

実際当時は未亡人が再婚するのめめずらしくなかった時代であって、現代に比べてはるかに再婚に寛大であった。

この時代の女性の婚姻には、同時的多夫婚（重婚）もあるが、どちらかといえば継次的多夫婚（再婚）が多い。しかし、継次多夫といっても、前夫がしない場合のそれは、同時多夫とほとんど区別がない。というのは、この頃の離婚には、離婚宣言がなく、ただ「夜がれ」「床さり」だけであるし、いつまた復活しないともかぎらない性格のものだからである。・・（中略）・・夫の死後の再婚は普通で、「貞婦両夫にみえず」などという四角ばった観念はなかった。⁵⁾

ここでも指摘されているように、当時再婚は普通におこなわれており、特に非難されるようなことでも、はずかしく思うことでもなかったのである。ただ、

この頃の女性で、再婚に臆病なものがあるとしたら、「さだ過ぎて」いたりして、再婚してもすぐすてられて、恥をかくからであり、たとえば故柏木の妻の落葉宮に夕霧が求婚したときの落葉とその母の態度などがそれを示している。⁶⁾

と述べられているように、身分の高い女性ほど世間の噂を気にするので、再婚後の男の自分への待遇で気をもむことが多かったのであろう。

いずれにせよ、落葉の宮は未亡人ではあるが、彼女は朱雀院の女二の宮で身分も高く、夕霧の新しい妻になるのに問題はない。夕霧があっけなくなってきた柏木を思っ何かと世話をするうちに落葉の宮に恋情をいたくことになるが、ここで落葉の宮本人の意思と夕霧の心があえば結婚できるものであった。未亡人になったばかりなので夫への義理のため駄目だとか、本文にはそういう問題もほとんど見れなく、かえって現在未亡人としてよりどころのない身になったので、これからの先を世話してくれる後見が切実に必要な時期でもある。

しかし、妻雲居雁の嫉妬がはげしいため、訪問することも思うようにできない。その頃病気のため衰弱していた落葉の宮の母一条御息所は夕霧と落葉の宮の間で何か実事があったと誤解する。先にも述べたように、未亡人として結婚した場合、夫から軽い扱いをされるとか、すぐすてられることは当時の貴族にとってたえがたいことであったため、一条御息所は娘に対する夕霧の態度が冷たいと思って、それが原因で他界してしまう。落葉の宮は母の死後母の死の原因が夕霧だと思って心をかたく閉ざすようになり、彼女との結婚はますます難しくなる。

5) 高群逸枝(1982)「女の結婚と財産」 日本文学研究資料刊行会・編『源氏物語Ⅳ』有精堂 p.265

6) 上同。p.265

このように状況上実際さほど難しくないように見えるこの結婚も、雲居雁の嫉妬、それに起因する一条御息所の死、それによる落葉の宮の拒否など、非常に複雑な経緯を経ることになる。しかし、時間が流れるにつれて、結局落葉の宮は夕霧の妻として一生を送ることになる。以後夕霧は誠実に半月ずつ雲居雁と落葉の宮に通う。

次に考察したいのは、薫とともに宇治十帖の主人公にあたる匂宮の結婚についてである。匂宮は今上帝の第三皇子であり、母は明石の中宮である。極めて高い身分と美貌、いい人柄で有名な匂宮は、娘を持った人はみな婿にしたがるすばらしい貴公子であった。

「匂ふや薫るや」と聞きにくめで騒がるなる、げにいと人柄重りかに心にくきを、やむごとなき親王たち大臣の、御むすめを心ざしありてのたまふなるなども聞き入れずなどあるにつけて、（「竹河」99頁）

しかし、自分はそれについてなんとも思わずにいる。中でも夕霧は娘三の宮と匂宮を結ぶべく努力し、紅梅大納言も自分の娘と結婚させたい意向を見せるが、それにも応じない。みんなそれなりにいい家柄の姫であるし、結婚することによって得られる政治的な力もさほど気にしていないことになる。

しかし、薫から宇治の姫君の話を聞いて、心が動く。薫とのライバル意識からのこともあるが、自由意志で自分から選んだ相手に対しては妻にすべく相当の積極性を見せる。

宇治の姫君たちの父である八の宮は、桐壺帝第八皇子で源氏の異母弟である。しかし、高い身分にもかかわらず政治的に不遇な境遇にあって、心の慰めであった北の方も次女出産後なくなってしまう、宇治の山荘で二人いる姫君の養育にだけ専念する日々を送っていた。八の宮の俗聖としての名声と姫君たちの噂を聞き、薫が興味を持って来訪し始めたのがきっかけで、匂宮は薫の手引きによって次女中の君と契ようになる。

しかし、この結婚は親に認められず、母中宮はそれを遊び歩きだと思って

「なほかく独りおはしまして、世の中にすいたまへる御名のやうやう聞こゆる、なほいとあしきことなり。何ごとももの好ましく立てたる心なつかひたまひそ。上もうしろめたげに思しのまたふ」（「総角」266頁）

と厳しく諫める。まだ匂宮が独身なので、遊び歩きをする好色男という噂がたつのを心配しているのである。しかし、匂宮は自分が決めた相手なので、彼女が遠く離れていてもまわりが彼女を結婚相手として認めなくても、心変わりせずに彼女を京に迎えるよう努力を続ける。以後やっとのことで母から中の君を京の邸宅に迎えてもいいという許可があり、一緒に過ごすことになる。匂宮は中の君を迎えた以後は、正式な妻を願う母の仲介で夕霧の娘六の君と新たに結婚し、両方ともいたわりながら無難な結婚生活を送る。

以上男側から妻を選ぶ物語が中心になっている代表的な例を見てきた。当時の結婚形

態がそうであったが、これらの例はほとんど男側から積極的に相手を求めて妻にする場合で、基本的に妻になる人の身分や家柄なども考慮はしているが、その考慮の程度は女側から旦那を選ぶ場合に比べてかなり低いことがわかる。

さらに、『源氏物語』の中では女側からの結婚選びの例に比べて男側から妻を選んだ場合は比較的失敗が少なく、両方とも満足しながら後々まで幸せに生きる例が多い。現代にも「男に愛されて結婚した方が、女が愛して男につくす結婚をするより幸せだ」という言葉がある。女性は受動的な結婚生活をおくらざるを得ないため、男側に愛されて妻に選ばれた方が男の愛が後々まで続いて幸せに暮せるはずであるし、『源氏物語』の中でも様々な例がそのような傾向を確認させてくれている。

また、紫の上や明石の君などのように源氏の結婚相手として選ばれ玉の輿にのる話などは、物語を大変ドラマチックで興味津々なものにさせている。この場合彼女たちが妻になるまで人間の力ではどうしようもない不思議な力—偶然な出会い、夢の告げ—などが緊密に作用し、必然的にまた運命的に彼女たちを源氏の妻にさせている。このように結婚相手選びの話は『源氏物語』の中で物語をより物語らしくし、よりおもしろいものにするのにも大きな役割を果たしているのである。

3. 女側からの結婚相手選び

男が妻を選ぶことも重要であるが、一夫多妻制の中に生きる女の場合はもっと結婚相手選びが重要になってくる。再婚についての認識がさほど厳しくない時代ではあったが、病気などの原因で夫が先になくならないかぎり夫は一生に一人が基本である。また、娘を結婚させる親の立場からも、自分の家門の繁栄のためにどのような人が婿になるかは大変重要な問題となるので、慎重にきめざるをえなかったはずである。

源氏の場合主人公で男なので、主に自分から妻を選ぶ側で物語が展開されているが、源氏の最初の結婚は源氏がまだ幼いこともあり、妻側の要望により結婚が成立される。源氏12歳の元服後むかえた最初の正式な妻は葵の上であるが、この結婚は源氏側の意思よりも左大臣家の積極的な態度によって成立したものである。つまり、源氏が葵の上を選んだというよりは婿として選ばれたというのが正しいのである。

引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御むすめ、春宮よりも御気色あるを、思しわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。（「桐壺」65頁）

左大臣が大事な一人娘を、しかも東宮からも結婚の申し入れがあったのにもかかわらず、源氏の妻にしたのは政治的な野心からである。左大臣の妻である大宮は帝の同腹の

妹だという縁もあるし、帝の寵愛の深い源氏にたった一人の娘を妻にさせることによって自分の政治的な立場や将来ををより確実なものにしようとしたのである。

その結果、

この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ、いづかたにつけてもいとはなやかなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。
(「桐壺」124頁)

とあり、結局源氏を婿にむかえることによって左大臣は東宮の祖父として今をときめく右大臣の勢力を圧倒してしまっただことがわかる。右大臣が左大臣の娘を東宮の妻にと求めたのも一種の政略結婚の意図からであり、協力関係を望んだためであった。しかし、左大臣はそれを断ってよりによって東宮のもっとも強い敵にあたる源氏を婿にして、右大臣の勢力に対抗して自分の政治的な地位を確実なものにしたのである。

しかし、政略結婚としては成功したが、結婚後葵の上は源氏より年上だということもあり、なかなかうちとけず、結局いい夫婦にはなれなかった。実際当時の結婚相手選びに歳のこととはさほど問題になれず、女性が年上だということもごく普通のことであった。

『源氏物語手鏡』でもこのことを指摘している。

年齢などはあまり窮屈に考えていない。元服の時、添臥になる正妻は、年上であるのが例である。女が、年上であることを気にしなかったというわけではないが、年齢は結婚の条件として対して問題になっていないのである。⁷⁾

これを見ると、源氏の場合のように、元服の時添臥になる妻は年上である場合が多かったことがわかる。妻が年上であるのがごく普通のことではあったが、『源氏物語』に登場する源氏の年上の妻の場合、高いプライドのためになかなか素直になれず、源氏に愛される妻になれない場合が多い。葵の上は結局源氏にうちとけることもなく、出産後あつけなくなるまで源氏に愛されないまま一生を終える。

この葵の上の例もそうであるが、『源氏物語』における女性の結婚相手選びの例を見ると、自分が相手を選ぶとか意見を出すことはほとんどなく、親が決める相手にただ受動的に従い、結婚する場合がほとんどである。男が積極的に相手を求めて結婚する場合と大変対照的である。物語の中で結婚相手を選ぶ場面で長々と語られているのは、結婚する本人の話ではなく、女性側の親が婿としてどの人がもっともいいのか考慮する話がほとんどである。葵の上や後に考察する女三の宮、その他の女性は結婚が決まるまで親が決めた結婚相手についてどのように思うのかさえ述べられていない場合が多い。これは身分が高いほ

7) 清水好子外(1996)『源氏物語手鏡』新調選書, p.110

どそのような傾向が強く、女性は結婚相手選びに徹底的に受動的であることがわかる。

次に考察する例もそうであるが、『源氏物語』の中で源氏が婿選びに大変苦心する場面がある。それは玉鬘の結婚相手選びの時で、ここではさまざまな候補者をおいてどの人がもっとも婿に適するかについて語られているので、考察してみたい。

玉鬘は源氏の養女で、源氏は美しい玉鬘で多くの貴公子の心を惹こうとする。実際臨時客に集まった若い貴公子たちは彼女の存在に心ときめかせ、求婚者も多く、懸想人も多い。そんな中で、源氏は第一候補者として蛭兵部卿宮を選ぶ。彼は桐壺院の皇子で、源氏の弟にあたる。身分も申し分ないし、源氏との仲もよかったので、源氏は「兵部卿宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。容貌などはすぐれねど、用意気色などよしあり、愛敬づきたる君なり。忍びて見たまひつや。（「蛭」199頁）」と求婚者の中では一番気に入っている。

ここで、蛭兵部卿宮が一番だという基準を見てみると、身分はもとより彼の性格や人品について誉めていることがわかる。彼が外見はすぐれていないが、心遣いや優しさがいい、と言っている。娘を結婚させる親の立場から、やはり将来性や身分も大事であるが、性格の良さも大変大事だったことがわかる。このような観点は、現代もまったく同じで、長い年月が流れても人間の基本的な考え方は変わらないことがわかる。

次に有力な婿の候補として柏木がいた。柏木は頭中将の長男で、玉鬘に熱心な若い求婚者の一人であった。頭中将は当時内大臣であり、その長男だったので、家柄や将来性は申し分ない方だった。さらに、源氏が玉鬘に届いた恋文を見ながら、それを送った貴公子についていろいろ話す時、

「いとらうたきことかな。下臘なりとも、かの主たちをば、いかがいとははしたなめむ。公卿といへど、この人のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。さる中にもいと静まりたる人なり。おのづから思ひあはする世もこそあれ。掲焉にはあらでこそ言ひ紛らはさめ。見どころある文書きかな」など、とみにもうち置きたまはず。（「胡蝶」172頁）

と柏木について非常にいい評価をくだす。現在の身分がさほど高いわけではないが、人柄や手紙の書き方などについて誉めており、彼に対していい印象を持っていることがわかる。彼は頭中将の長男なので、実際のところ玉鬘とは実姉であるが、ここでそれは問題視していない。つまり、実姉といっても母が違うためなのか、結婚相手として考えるのにその点が妨げにはなっていないことがわかる。

そして、一つ玉鬘も困惑していたのは、源氏の求愛であった。源氏は貴公子たちの求愛を楽しみながら、自分も彼女に恋情をうたえている。玉鬘はこのような求愛に対してかなり当惑感を感じる。実父ではないと言え、義理の親である源氏の求愛は常識はずれであるが、『源氏物語評釈』には、源氏が玉鬘に求婚するのにふさわしくない相手でもないが、

義理でも親であるため駄目だということが説明されている。

もちろんあの監に比べると、源氏は、問題にならない。感じはよい。監というのは、玉鬘が九州にいたころの求婚者の一人で、肥後一帯の勢力家であった。……(中略)……あの大夫の監に比べると、あまりにもったいない源氏ではあるが、しかし、姿容貌はともかくも、監が求婚するのにはすこしの不思議も不合理もない。が、この源氏はいやしくも親ではないか。それも、世間に真相を明かして後なら話は別だが。⁸⁾

当時の考え方から見ると、玉鬘が義理の娘ではない場合、源氏は結婚相手としてまったくおかしくないのである。この他にも求婚するいい貴公子も多かったし、天皇からの要望もあったが、結局玉鬘は髭黒の妻になってしまう。しかし、最初源氏は髭黒が彼女の相手としてあわないと思っていた。彼は右大臣の子で、承香殿女御と兄弟である。身分が低いわけでもないが、「右大将などをだに、心にき人にすめるを、何ばかりかはある、近きよがにて見むは、飽かぬことにやあらむ（「蛭」200頁）」とあり、蛭兵部卿宮と比べたらやはり物足りない男だと言っている。

さらに、玉鬘自身も行幸の時髭黒を实际見て、「色黒く髭がちに見えて、いと心づきなし。「行幸」284頁）と、その容貌が気に入らなかった。その前に帝のりっぱな姿を見て心ときめきしていたので、なおさらであったはずである。

しかし、本文にはそのすぐ後に

いかでかは女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ。いとわりなきことを、若き御心地には見おとしたまうてけり。（「行幸」284頁）

とあり、男は化粧する女のように外見で判断すべきものではないのを、若い娘たちはそれにこだわっていると指摘している。若い女性たちは容貌にこだわるが、主な男の価値を容貌におかないのは現代も同じことで、非常に興味深い。

また、もう一つ源氏が髭黒に気が進まない理由は、彼にすでに三つ四つ年上の本妻があり、特にこれといった理由もなしに彼女を姫と呼びながら、憎んでいたことにある。すでに本妻がある上、その方との仲が睦まじくないことから、安定的で幸せな結婚となるのに障害がありすぎると判断したのである。その点蛭兵部卿宮は早くから北の方と死別していたので、いいと思われた。

髭黒が手紙を出しても玉鬘からは返事もないし、様々な面で源氏と玉鬘本人から結婚相手として不相応だと思われていたのにもかかわらず、髭黒は熱心で、玉鬘の女房の手引きで結局玉鬘を自分のものにしてしまう。最初は源氏も気が進まなかったし、玉鬘も最初は打

8) 玉上琢弥(1965)『源氏物語評釈第五巻』角川書店, p.289

ち解けなかった。しかし、本妻との縁も切れて、結局夫婦として仲よくすごし、後は多くの子供にめぐまれる。

このような形の結婚も当時は存在していたのである。現代と違って建物の奥深く過ごしていた身分の高い姫君を、いくら女房の手引きがあったと言え、相手の意向も無視して自分のものにして結婚にいたる。親も特に彼を結婚相手として認めていなかった状況であったので、もっと難しかったことと思われる。しかし、すでに誰かの男のものになった後は、もうどうしようもない。源氏もことのなりゆきを知って、残念に思いながらも髭黒を婿として手厚くもてなし、時間が流れるにつれてお互いの関係もよくなるのである。

次は源氏の最後の正妻である女三の宮について考えてみたい。この場合も婿選びに相当苦心する話が長々と述べられているので、考察に値する。40歳になり、栄華の頂点にあった源氏が新たに正妻として迎えたのは女三の宮である。彼女は朱雀院の第三皇女で、朱雀院は出家を前にもっとも愛する女三の宮の結婚相手を選ぶのに苦慮していた。柏木を含め求婚する貴公子たちも多かったが、朱雀院は結局源氏を婿に選択する。

この時すでに源氏には多くの妻と特に寵愛する紫の上がいたし、源氏が40歳、女三の宮はまだ14歳で、歳もあまりにも差があったので、幸せな結婚となるのは無理があるように見える。しかし、当時権力のある人は多くの妻がいて当然だったし、歳の差もさほど結婚の妨げにならなかったのも、源氏が女三の宮の結婚相手となるのに問題はなかった。

朱雀院は「見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならむことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえはや（「若菜上」20頁）」と言って柏木を含めて、蛸宮、別当大納言などの人と源氏の長所と短所を比較しながら、女三の宮の婿を選ぶのに苦慮を重ねていた。この場面における朱雀院の言葉は、当時女性の結婚相手選びの時親なら誰でもしたはずの悩みをよく見せてくれているので、引いてみたいと思う。

皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなる事も、めざましき思ひもおのづからうちまじるわざなめれと、かつは心苦しく思ひ乱るるを、またさるべき人に立ち後れて、頼む陰どもに別れぬ後、心を立てて世の中に過ぐさむことも、昔は人の心たひらかにて、世にゆるさるまじきほどの事をば、思ひ及ばぬものとならひたりけん、今の世には、すきずきしく乱りがはしき事も、類にふれて聞こゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほなほしく下れる際のすき者どもに名を立ち、あざむかれて、亡き親の面を伏せ、影を辱づかしむるたぐひ多く聞こゆる、言ひもてゆけば、みな同じことなり。（「若菜上」27頁）

ここで見るように、女性は結婚相手が誰になるかにつけて運命も変わるもので、夫が栄華を見て自分も幸福な場合もあるが、いくら高い身分の高貴な女でも夫によってその人生が左右される。また、朱雀院は夫に先立たれたり、好色男にひっかかって浮名を立てることも

心配している。これはまったく現代も同じことが言えるが、当時の娘の結婚を考える親なら、誰でもこんな心配をしてたはずである。

では、朱雀院が女三の宮の相手としてとりあげた貴公子たちの評価を見てみたい。兵部卿宮については

兵部卿宮、人柄はめやすしかし。同じき筋にて、他人とわきまへおとしむべきにはあらねど、あまりいたくなよびよしめくほどに、重き方おくれて、すこし軽びたるおぼえや進みにたらむ。なほさる人はいと頼もしげなくなんある。また大納言の朝臣の、家司望むなる、さる方にものまめやかなるべきことにはあなれど、さすがにいかにぞや。さやうにおしなべたる際は、なほめざましくなんあるべき。（「若菜上」29頁）

このように兵部卿宮は人柄もよく、皇族なので身分などについては問題ない方である。しかし、軽薄な感じがするところと、身分がすぐれたわけでもないのも、このようにありふれた身分の男を婿に取るのはやはりよくないと言っているのである。娘がいい身分の場合、ありふれた身分の男を婿に取るのは昔からさほどよくないと思われたようで、朱雀院は昔の人々の話をしながら、婿は常人とは異なる人をと望んでいる。

さらに、右衛門督が女三の宮に気があるようであるが、朱雀院は彼がまだ大変若く、将来性はあるかも知れないが、身分や様々な面で今の段階では女三の宮の相手としてふさわしくないと断定している。

右衛門督の下にわぶなるよし、尚侍のものせられし、その人ばかりなん、位などいますこしものめかしきほどになりなば、などかはとも思ひよりぬべきを、まだ年いと若くて、むげに軽びたるほどなり。高き心ざし深くて、やもめにて過ぐしつづ、いたくしづまり思ひあがれる気色人には抜けて、才などもこともなく、つひには世のかためとなるべき人なれば、行く末も頼もしけれど、なほまたこのためにど思ひはてむには限りぞあるや」（「若菜上」29頁）

さらに、夕霧も後見と結婚相手として朱雀院の考慮の対象となった。彼の見た目のすばらしさと人品は、朱雀院もまわりの女房たちもみな誉めざるをえないほど大したものであった。身分も将来性も申し分のない男であり、朱雀院も彼に後見のことをほのめかす。断る理由も特にはないはずであるが、夕霧は当時長い間の念願が叶い、雲居雁との結婚ができたので、はっきり有無を言えない。朱雀院も夕霧の誠実さを認めながらも、すでに夕霧のもっとも愛する正妻雲居雁がいるので、その第二婦人として女三の宮を結婚させるのをあきらめる。

このほかにも様々な男への考慮があった。本文からわかるように兵部卿宮も右衛門督もいくらかの短所はあるし、まだ若いので源氏よりは様々な面で足りない。しかし、源氏は女三の宮より年もずっと上だし、すでに多くの妻も六条院に同居している状況である。にもかかわらず、求婚する多くの貴公子たちをさしおいて、朱雀院が結局源氏を選んだ理由は

かの六条の大殿は、げに、さりともものの心えて、うしろやすき方はこよなかりなんを、方々にあまたものせらるべき人々を、知るべきにもあらずかし。とてもかくても人の心からなり。のどかに落ちゐて、おほかたの世の例とも、うしろやすき方は並びなくものせらるる人なり。（「若菜上」28頁）

つまり、朱雀院は源氏の人格を信じ、妻が多い中でもうまくやっていけると思っているし、源氏が栄華の絶頂にあり、豊かに過ごしていて将来もまったく心配がなく、女の立場から見たら理想的ですてきな男性だからである。一夫多妻制であることだけは違うが、このようなことは現代でもしばしばみることができる。男の方が年がいくら多くても、財産や能力だけすぐれていれば、それでいい結婚相手として認められる。このような傾向は、昔はもっと強くて、ここでも源氏は他のすばらしい貴公子たちも比べ物にならない、もっともいい婿として思われているのである。

さらに、春宮の賛成もあり、結局朱雀院は最初後見役として考えた源氏を正式な結婚相手として決めることになる。

源氏の方から見れば、葵の上の死後源氏に正妻がなかったので、身分の高い女三の宮は申し分のない結婚相手ではあったが、最初は天皇に入内させた方がいいと自分は辞退する。しかし、結局後見を引き受け、婿になることを決める。

しかし、朱雀院が出家を前にそれほど悩みながら慎重に決めた結婚であったが、この結婚は結果的に女三の宮を不幸に、また源氏の運命をも悲劇的なものにするのに決定的な原因となる。紫の上は女三の宮が来ることによって今までの第一婦人の座を奪われ、また自分より身分も高く、正妻として盛大に迎えられた女三の宮の存在に大変な危機感を感じる。実際女三の宮を見た源氏は彼女の未熟で幼稚なところにつかりし、紫の上への愛がより深まるが、それでも女三の宮へのライバル意識から来るストレスで紫の上は重い病気になる。源氏は紫の上の看病にだけ熱心で、女三の宮は正妻ではあるが、形式的な妻にすぎなくなる。そのような折女三の宮への未練を捨てずにいた柏木と過ちをおかし、子供も産む。その罪意識で柏木は死に、女三の宮は若くして出家してしまうという不幸な結末にいたっている。

このように女三の宮との結婚は栄華を極めていた源氏とそのまわりの人に黒い影を落とし、女三の宮、柏木、朱雀院などの人を不幸にさせ、さらに女三の宮の産んだ薫も自分の出生の秘密を知って一生それをかけとして背負って生きるという、暗い結末への始発点となっている。作者は源氏の残りの人生を描くのに、栄華と幸せだけで終わらせないで、その後ろにある不幸もいっしょに書いているのであるが、それを無理なく自然な経緯で描くためにこの女三の宮との結婚を利用している。一方では、自分自身が高い身分で何不足のない人に嫁いでも、結婚次第でこのように不幸な人生を生きるしかないという一つの例も見せてくれているのである。

4. 結

以上考察してきたように、『源氏物語』には様々な結婚相手選びの様相が見られる。その中には政治的な目的、物語の中での必然性、人間関係などが複雑にからみあい、そのすべてが物語の展開に重要な役割を果たしている。

昔も今も結婚というのは一生が決まる重大事であるだけに、結婚相手を選ぶことには誰もが考慮を重ねている。おもしろいのは一夫多妻制の中を生きた男の場合も、やはりそれは同じだということである。妻が多くても、遊び相手や忍びところの相手は別として正式な妻をむかえる時は、誰もその相手選びに頭を悩ます。当時の結婚が現代と違う点と言えば、近親結婚とか政略結婚などの傾向が著しいことであるが、実際相手を将来性とか政治的目的で選ぶ場合も、その人間性や性格なども重要な考慮のポイントとなっていることを看過してはいけない。

特に男の場合より特に女性が結婚相手を選ぶ立場は、より慎重にならざるを得なかったし、結婚の相手を決める主体も大きく違う。男の場合は自分の意思で妻を選ぶことが可能で、そのような例が多く見られるが、『源氏物語』における女性の結婚相手選びの例を見ると、女性自身が相手を選ぶとか意見を出すことはほとんどなく、親が決める相手にただ受動的に従い、結婚する場合がほとんどである。男が積極的に相手を求めて結婚する場合と大変対照的である。物語も、女性が結婚相手をえらぶのではなく、すべて親が娘の婿を選ぶ形で展開されているのが大きい相違点である。

娘の婿を選ぶ親の立場では、婿が将来どれぐらい出世し、自分の家門にいい影響を及ぼしてくれるかも重要であるが、それと同時に娘がその男の妻になり、どれだけ幸せに生きられるかも重要視されているのである。いくら能力のある男でも、好色だとか、人間性が悪いとか、すでに妻が多いとかの場合はやはり躊躇せざるを得ない。これは政略結婚が基本だった当時においても現代においても同じで、いくら文化が違って長い年月が流れても、人間の基本的な観念は変わらないということが確認できる。

『源氏物語』における結婚相手選びの特徴と言えば、やはり物語であるだけに結婚相手選びにおいても大変劇的でドラマチックに物語が展開される場合が多い。特に先述した物語の中で長々と結婚相手選びについて述べられている場合は、さらにそのような傾向が強い。中でも源氏の妻たちの場合そのような傾向が著しく、紫の上や明石の君などがその例と言える。また、人間の意志で決める相手選びに、夢や神の告げなどが決定的な役割をする場合もしばしば見られる。

さらに、男側と女側の二つに分けて結婚相手選びの主な例を見てきたが、男側から妻を選んだ場合は比較的失敗が少なく、後々まで夫婦が二人とも満足しながら生きる例が多い。しかし、逆に物語の中で女性側から婿を選ぶ例などを見ると、非常に考慮を重ねて決

めた結婚ほど、後の不幸や悲劇にいたる場合が多い。

葵の上の場合、左大臣が東宮からの結婚の申し入れも無視して政治的目的で選んだ婿源氏とはずっと夫婦仲が悪く、後は男の子を出産して物の怪によって急死するという悲劇的な人生を送っている。さらに、玉鬘の場合源氏が彼女の婿として考慮を重ねた他の貴公子たちとは結局縁がなく、源氏も玉鬘ももっとも婿として気に入らなかった髭黒と結婚することになる。この場合は最後は子も多くうけて幸せに生きることになるが、最初は自分の願った結婚相手ではなかったため玉鬘が長い間打ち解けず不幸に過ごすし、髭黒もわりと早く亡くなり、未亡人として生きる姿が描かれている。さらに、女三の宮の場合はそのような傾向がもっとも強い。朱雀院が出家を前にそれほど悩みながら慎重に決めた結婚であったが、この結婚が結果的に女三の宮と栄華の頂点にあった源氏の運命をも悲劇的なものに、紫の上を死に、ほかの人たちをも不幸にするのに決定的な役割をするのは先述した通りである。

【参考文献】

- 1992 日本古典文学全集 『源氏物語』 小学館 p.221
- 1999 新編日本古典文学全集 『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』 小学館 p.297
- 1994 新編日本古典文学全集 『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』 小学館 p.256
- 2000 『日本風俗史事典』 弘文堂 p.201
- 日本文学研究資料刊行会・編(1982) 『源氏物語Ⅳ』 有精堂 p.265
- 玉上琢弥(1965) 『源氏物語評釈』 角川書店 p.289
- 吉本隆明(1982) 『源氏物語論』 大和書房 p.137
- 角川春樹(1983) 『平安朝の生活と文学』 角川書店 p.92
- 林田孝和(1983) 『王朝びとの精神史』 桜楓社 p.331
- 市古貞次・編(1980) 『日本古典文学研究必携』 (「別冊国文学特大号」) 学灯社 p.83
- 森一郎編著(1993) 『源氏物語作中人物論集』 勉誠社 p.134
- 秋田加奈子(2007) 「紫の上の結婚：定説と実態」 『青須我波良』 Vol.60, 帝塚山大学 p.77
- 工藤重矩(2002) 「平安朝貴族の結婚と源氏物語」 『福岡教育大学国語科研究論集』 43号, 福岡教育大学国語国文学会, p.10
- 米田真木子(2005) 「『源氏物語』における「さるべき人」の行方--「親子」「後見」「結婚」のはざま」 『物語研究』 No.5, 物語研究会, p.38
- 米田真木子(2003) 「『源氏物語』の〈結婚〉：「後見」という視座から：光源氏を中心に」 『フェリス女学院大学日文学大学院紀要』 Vol.10, フェリス女学院大学, p.35
- 郭 潔梅(2000) 「『源氏物語』 桐壺巻と漢武帝の故事--源氏の元服・結婚をめぐる」 『和漢比較文学』 No.25, 和漢比較文学会, p.17
- 藤岡忠美(1982) 「愛と結婚--「紫式部集」にみる藤原宣孝との贈答歌」 『国文学 解釈と教材の研究』 Vol.27, 学灯社, p.35
- 藤井貞和(1978) 「タブーと結婚--光源氏物語の構造」 『国語と国文学』 Vol.55, 至文堂 p.16
- 松井健児(2000) 「真木柱 心浅き人のためにぞ、寺の験もあらはれける--玉鬘の結婚を伝える語り」 『国文学 解釈と教材の研究』 Vol.45, 学灯社, p.132

要 旨

昔も今も結婚というのは一生が決まる重大事であるだけに、結婚相手を選ぶことには誰もが考慮を重ねている。おもしろいのは一夫多妻制の中を生きた男の場合も、やはりそれは同じだということである。当時の結婚が現代と違う点と言えば、近親結婚とか政略結婚などの傾向が著しいことであるが、実際相手を将来性とか政治的目的で選ぶ場合も、その人間性や性格なども重要な考慮のポイントとなっていることは現代と類似している。

特に男の場合より特に女性が結婚相手を選ぶ立場は、より慎重にならざるを得なかったし、結婚の相手を決める主体も大きく違う。男の場合は自分の意思で妻を選ぶことが可能で、そのような例が多く見られるが、『源氏物語』における女性の結婚相手選びの例を見ると、女性自身が相手を選ぶとか意見を出すことはほとんどなく、親が決める相手にただ受動的に従い、結婚する場合がほとんどである。男が積極的に相手を求めて結婚する場合と大変対照的である。物語も、女性が結婚相手をえらぶのではなく、すべて親が娘の婿を選ぶ形で展開されているのが大きい相違点である。

娘の婿を選ぶ親の立場では、婿が将来どれぐらい出世し、自分の家門にいい影響を及ぼしてくれるかも重要であるが、それと同時に娘がその男の妻になり、どれだけ幸せに生きられるかも重要視されているのである。これは政略結婚が基本だった当時においても現代においても同じで、いくら文化が違って長い歳月が流れても、人間の基本的な観念は変わらないということが確認できる。

『源氏物語』には様々な結婚相手選びの様相が見られる。その中には政治的な目的、物語の中での必然性、人間関係などが複雑にからみあい、そのすべてが物語の展開に重要な役割を果たしている。

『源氏物語』における結婚相手選びの特徴と言えば、やはり物語であるだけに結婚相手選びにおいても大変劇的でドラマチックに物語が展開される場合が多い。特に物語の中で長々と結婚相手選びについて述べられている場合は、さらにそのような傾向が強い。中でも源氏の妻たちの場合そのような傾向が著しく、紫の上や明石の君などがその例と言える。また、人間の意志で決める相手選びに、夢や神の告げなどが決定的な役割をする場合もしばしば見られる。

さらに、男側と女側の二つに分けて結婚相手選びの主な例を見てきたが、男側から妻を選んだ場合は比較的失敗が少なく、後々まで夫婦が二人とも満足しながら生きる例が多い。しかし、逆に物語の中で女性側から婿を選ぶ例などを見ると、非常に考慮を重ねて決めた結婚ほど、後の不幸や悲劇にいたる傾向が強い。

キーワード：源氏物語、結婚、結婚相手、選び、妻、夫、婿

투 고 : 2008. 5. 31
1차 심사 : 2008. 6. 14
2차 심사 : 2008. 6. 28

주 소 : (323-812) 충남 부여군 규암면 합정리 430 한국전통문화학교 문화재관리학과
전 화 : 041-830-7373(연구실), 010-3454-1267(휴대폰)
e-mail : sirayuki@paran.com